

観察する女性／観察される女性  
シカゴ学派社会学におけるジェンダー

酒井千絵

While Women were Observed as the Social problem,  
Women Also Observed the City

— Gender relations in the Chicago School of Sociology in the early 20<sup>th</sup> century

Chie SAKAI

**Abstract**

This paper examines women's role as researcher as well as research subject in the early Chicago School of Sociology. Since the founding of the University of Chicago in 1892, Chicago has become the center of sociological research in the United States of America. In the newly developed city of Chicago, sociologists were already researching social change and its problems. In sociological research women mainly appeared as examples of social dysfunction, such as prostitutes or teenage runaways, for example, but female researchers and social reformers played an important role in the way the Chicago School of Sociology grew and progressed. Looking at three published pieces of research (Hull-House's "Maps and Papers", Paul G. Cressey's "The Taxi-Dance Hall", and Frances Donovan's "The Woman Who Waits") and unpublished documents archived in the special collections of the University of Chicago Library, this paper makes clear that women's point of view was crucial in the development of sociology in Chicago.

Keyword: Gender, the Chicago School of Sociology, History of Sociology, City, Women's work

抄 録

20世紀前半までのシカゴ学派社会学は、関心の対象である社会変動を、しばしば女性の役割の変化や規範からの逸脱を通して論じてきた。さらに、シカゴ大学は開学当初から男女共学の研究教育機関であったことに加え、当初からハル・ハウスなどの女性を中心とする社会改革運動とも密接な関係を持っていた。そのため、女性は調査の対象であると同時に、新しい都市問題を調査・研究する側でもあった。本稿では、当時公刊された研究書とシカゴ大学図書館のアーカイブに収蔵されている資料を、シカゴ学派社会学における女性の役割を分析する。特に、シカゴ学派社会学の成立と発展において、調査を行う側として関わった女性が、女性の行動や意識の変化を異なる視点から考察し、シカゴ学派社会学の特色ある発展に寄与していったことを明らかにする。

キーワード：ジェンダー シカゴ学派社会学 社会学史 都市 女性の職業

「十八歳の若い娘が家庭を離れば、残された道は二つしかない。救いの手うまく出会ってましな身の上になるか、コスモポリタ的な道徳観をたちまち身につけて墮落するか、どちらかである。このような状況のもとでは、その中間の道などありえない。——都会の美はしばしば音楽のように、その正体を知られぬまま、無邪気な人の心をなごませ、やがて弱め、そして悪の道へ連れて行く。

— シオドア・ドライサー 『シスター・キャリー』

「(ウェイトレスは) 他人からの道徳的な支持がなくても、自分の生活を続けられる。彼女たち自身が、新しい基準を決めていくリーダーなのである。」

— フランシス・ドノヴァン 『ザ・ウーマン・フー・ウェイツ (給仕する女性)』

## 1. 問題の所在

### 1-1 シカゴ学派社会学を現在の視点から考える意味はなにか

本論文は、1930年代までのシカゴ学派社会学の中で、研究の担い手として、また調査対象として、女性が果たした役割を考察するものである。

シカゴ学派社会学は、1892年設立のシカゴ大学を中心に発展した社会学を指す。ヨーロッパでもまだ新しい学問だった社会学を建学当初から学部を持ち、教育・研究を行ってきたシカゴ大学は、アメリカ社会学の誕生に寄与した。シカゴで学んだ研究者はアメリカ国内に散らばり、そこで教員として働くことによって、社会学がアメリカに広まる際に重要な役割を果たしてきた。また、19世紀後半から20世紀前半という、アメリカ社会に大きな社会変動が生じた時期にあって、インタビューや参与観察などの質的調査を中心に、様々な社会調査の方法を取り入れた調査研究を行った。

1918年には、シカゴ大学出版会 (University of Chicago Press) が、社会学研究シリーズの出版を開始し、その後もシカゴ大学で研究指導を受けた研究者の作品を継続的に世に出していった。今も私たちが当時のモノグラフを読んで興味を引かれるのは、これらが現在につながる社会問題を課題とし、具体的な行動や語りを引用しながら、状況を描き出しているためだろう。実際、時代も場所も異なるにも関わらず、モノグラフの中に引用される都市生活者たちの言葉は、自分たちが現在直面している困難とも共通しているように感じられ、それがシカゴ社会学の魅力のひとつとなっている<sup>1)</sup>。

1) シカゴ大学の社会学モノグラフは数多く邦訳されてきたが、現在も入手可能なものとして、ネルス・アンダーソン『ホーボー』、クリフォード・ショウ『ジャック・ローラー』、ハーヴェイ・ゾーホー『ゴールド・コーストとスラム』などがある。

他方、「シカゴ学派社会学」とは実際に一定のまとまりを持つ実体的なものと言えるのかという問い自体が、今日のシカゴ学派社会学への関心の一部となっているようにもみえる。現在のシカゴ大学社会学部に所属して、シカゴ学派社会学を研究対象としているアンドリュー・アボットは、*American Journal of Sociology* とシカゴ大学社会学部のアーカイブ資料を分析し、1930年代にはすでにシカゴ大学に所属する社会学者たちを、1つのネットワークに位置づける見方は存在していたものの、必ずしも一般的な意見ではなかったと述べている。シカゴ学派社会学の成果や現代的意義を論じる書籍の序文で、中野正大 [2003] も、ブルーマーやベッカーなど、シカゴ学派社会学につながる研究者自身が、シカゴ学派を一貫した学派とする見方に違和感を表明していると指摘する。

このような、シカゴ学派社会学に対する両義的な立場に対し、アボットは、リン・ロフランドの論文を引用し、「シカゴ学派について述べることは、その現象そのものと同じくらい、論述している人の姿をさらけ出す」ものであり、「シカゴ学派の伝統は、現在の知的な目的にとって適合的と思われるようなものとして、利用されつづけていた」と述べている [Abbott, 1999=2011: 18]。シカゴ大学は社会学教育を長く行い、社会学を専門とする研究者を育成してきたが、そこには、必ずしも明示的な1つの学問集団が存在していたわけではない。むしろ後年の研究者たちによって、発見され、意味づけられることによって始めて、シカゴ学派社会学は、まとまりを持つ「学派」として立ち上がってきたのである。

アボットは、シカゴ学派への関心は、人々が社会学の重要な要素として強調したいものを、シカゴ学派の伝統の中に位置づけることにあるとしている。シカゴ学派社会学について考えることは、つまり、当時の社会学をそのまま論じるのではなく、そこに現代につながる視点を見いだすことなのだ。

本稿では、都市化が進んだ20世紀初頭のシカゴを研究した人々が対象とした社会問題のなかで、女性が大きな存在感を持っていることに注目する。この時期のシカゴでは、産業構造が変化し、急速な人口流入によって都市が拡大し、合わせて労働のあり方、娯楽、家族や近隣とのつながりも大きく変化した。シカゴ学派社会学にとって、都市化に伴う社会問題は重要な研究対象であったが、その中には犯罪や売春、家族の解体など、女性に関わる問題が大きな位置を占めていた。他方で、こうした問題に取り組み、調査や研究を行った人の中には、女性が数多く含まれているにもかかわらず、現在の社会学の中で言及されることは少ない。

全体の構成は以下の通りである。第2章では、調査対象であるシカゴとシカゴ大学を事例に、社会問題と女性の関わりを見ていく。第3章では、実際にシカゴで行われた社会調

査をとりあげ、調査する女性と、調査される女性を対比する。具体的には第1節で、ジェーン・アダムズと彼女たちが作ったセトルメントのハル・ハウスによる調査、第2節でポール・G・クレッシーの『タクシーダンス・ホール The Taxi-Dance Hall』、第3節では、フランシス・ドノヴァンの『ザ・ウーマン・フー・ウェイツ The Woman Who Waits』における女性を考察する。第4章では、女性が研究者やソーシャルワーカーとして社会学に参入することにより、社会問題としての女性の把握にどのような効果があったのかを明らかにする。

## 1-2 方法と対象

本稿では、2012年9月から2013年3年に筆者が関西大学学術研修員の機会を得て、シカゴ大学に訪問研究員として滞在した半年間、さらに平成26年度関西大学若手研究者育成経費の助成により、2014年8月および2015年3月に合わせて3週間シカゴ大学に滞在した時に閲覧した、リーゲンスタイン図書館内のシカゴ大学特別コレクションリサーチセンターに収蔵されている資料をデータとして用いている。本稿では特に、20世紀前半の資料を中心に、女性が社会学部とその調査の中で果たした役割に関する資料、シカゴ学派の黄金時代を代表するE. W. バージェス、R. パーク、またシカゴ大学出版会の資料の一部を分析する。同センターが所蔵するシカゴ学派に関する資料は膨大かつ多岐にわたっており、たとえばE. W. バージェスの資料は204箱、R. パークは26箱ある。そのため、閲覧できた資料はごく一部であり、本稿ではバージェスの授業関連の資料、P. クレッシーをはじめとする学生とのやりとり、シカゴ大学出版会の資料から、P. クレッシー、F. ドノヴァンの著作出版までの書類や新聞記事・書評などを分析に用いている。今回論文中で扱ったもの以外にも、ジェーン・アダムズとセトルメントのレジデントとの私信のやりとり、バージェスの家族や結婚についての調査データなど興味深いものも多数あったが、本稿では取り上げていない。

また、本稿は1920～30年代に公刊された社会学のモノグラフを分析対象としている。当時出版されたモノグラフには、現在も書籍として流通しているもの、邦訳が存在するもの、すでに著作権法のもとでパブリックドメインとして、PDFや電子書籍として公開されているものなどがあるが、現在の入手のしやすさは様々である。特にドノヴァンの本は、筆者が入手した書籍版もパブリックドメインのデータを印刷して製本したものであったため、他の版とはページ数等に相違がある可能性もある。

この論文では、シカゴの都市問題における「女性」をめぐる、複数の異なるアプローチ

を例示し、比較することを目的としている。これらの研究がそれぞれどのような議論を展開しているのかについては、今回は十分に検討することが出来なかった。今後の課題としたい。

## 2. シカゴ学派社会学とシカゴ大学

### 2-1 私たちはシカゴ学派社会学をどのように見てきたのか

アメリカでは、植民地時代の17世紀には、ハーバード大学をはじめとする東部の有力大学がすでに設立されていた。19世紀になると産業革命の進展により中西部への人口流動が進み、大学も徐々に増えていった。1892年に設立されたシカゴ大学は、当初から、先行する名門大学に劣らない教育研究を目指す研究大学であり、また社会学部を開学時から持ち、アメリカに新しい学問である社会学を根付かせ、広める役割を果たしてきた。1895年にアメリカ初の社会学の学術雑誌として、シカゴ大学を中心に創刊された *American Journal of Sociology* は、1936年に創刊された *American Sociological Review* と並び、現在も有力な学術雑誌であり続けている。こうした経緯から、シカゴ大学で教育を受け、研究活動に従事する社会学者の総体を、シカゴ学派社会学と呼ぶようになっていった。

シカゴ学派社会学は、担い手の世代交代や、アメリカの社会学全体に対して果たす役割を通して、いくつかの時期に区分される。中野 [2003] は、先行する学説研究を整理し、シカゴ学派とその主要な研究者を、1) 創設期メンバーの時代 (A. スモール、W. I. トーマスら)、2) 黄金時代と呼ばれる時期 (R. E. パーク、E. バージェス、E. フェアリス、オグバーンら)、3) 第2世代の教え子がシカゴで教えていた時代 (ブルーマー、ワース、E. ヒューズら)、4) 第3世代の教え子が、シカゴを離れて活躍した時代 (H. ベッカー、A. ストラウス、E. ゴフマンら)、の4世代に分類している。4) の時期の存在は、シカゴ学派社会学が単にローカルな研究グループに留まらず、アメリカの社会学に大きな影響を与えてきたという認識を反映している。

中でも、しばしば「黄金時代」と呼ばれる第2期は、100年近く昔であるにもかかわらず、今も多くの人々の関心を集めている。その背景には、大学のあるシカゴを「実験室」と呼び、都市化していく社会を把握しようとしてきた社会学的なまなざしがある。1837年に市となったシカゴは、その前後から急速な産業の発展と人口増加を経験した。シカゴ学派社会学は、都市化の結果としての逸脱、コミュニティや家族の変化を対象に、調査研究を行ってきた。

また、1920年前後に行われた研究は、質的調査を中心とする折衷的な方法を用いているため、ここに現在の社会学に対するオルタナティブを見るという意味で、方法論的な関心も高い。シカゴ社会学ではロバート・パークが、学生に尻を汚して調査を行うようにと指導したという逸話もあるように、現地に赴いて調査を行うことを重視する傾向があった。その後社会統計や計量分析の方法論が進化していく中で、20世紀初頭の折衷的な調査方法は、いったん表舞台から退いていく。他方で、先の区分でいえば、第3期に当たるブルーマーやヒューズの時期には、定量調査とは異なる質的な方法を、シカゴ学派のアイデンティティとして強調した時期もあったという [鎌田 2008]。シカゴ学派社会学が、質的な研究を一貫して行ってきたというイメージが事実とは異なるとしても、結果として、社会学の主流となった組織的な定量調査だけでなく、個人がある程度長い時間をかけて、単独で行う調査方法が長期にわたり行われ、成果を上げてきた。また、女性や若手研究者など、調査資金や人員の確保が難しい人々にとっては、少人数でも結果を出しやすい質的調査が盛んであることが利点となった側面もあるだろう。

## 2-2 男女共学と研究に携わる女性の存在感

他方、前節で示したリストにみられるとおり、シカゴ学派社会学を扱った現在の学史研究のなかで、主要な研究者として挙げられる名前の大半は男性であり、女性の研究者が取り上げられることはまれである。もちろんこれはシカゴ大学や社会学に限ったものではなく、学術研究において女性の研究者に与えられる役割は相対的に小さなものでありつづけてきた。

しかし、シカゴの社会学に女性が果たした役割は、現在考えられているよりもずっと大きい。シカゴ大学が研究機関としてスタートしたのとはほぼ同時期である1889年に、ジェーン・アダムズは、エレン・ゲーツ・スターとともに、シカゴの中心部にセツルメント、ハル・ハウスを創設した。アダムズとハル・ハウスは、初期のシカゴ大学の社会学者や哲学者と密接な関係にあった [Deegan 1988]。また、シカゴ大学出版局のモノグラフの一冊として、1928年に『自殺』を出版しているルース・S・キャバンは、シカゴ大学で学位を取り、シカゴ大学を離れるまでは、バージェスとの共同研究も行っている。カナダ出身のヘレン・マギルは、ロバート・パークのもとで1936年に博士号を取得し、博士課程の同級生であったエヴェレット・ヒューズと結婚して共同研究を行うとともに、1944年から1961年まで『アメリカン・ジャーナル・オブ・ソシオロジー』の事実上の編集者だった [Abbott 1999]。

また、正規の学生としてではないが、大学院で社会学部の授業を聴講し、パークから指

導を受けたフランシス・ドノヴァンは、1929年にシカゴ大学出版会から『セールスレディ (The Saleslady)』を出版したほか、その前後に書かれた『ザ・ウーマン・フー・ウェイツ (The Woman Who Waits)』と『スクールマ'am (The School Ma'am)』の3冊のモノグラフを出版している。ロバート・パークは、シカゴ大学出版会に『セールスレディ』を推薦する手紙を書き、本にも序文を寄せている [University of Chicago Press Box 154 Folder 4]。彼は理論や方法には不備があると述べながらも、研究対象とそれに対するアプローチを高く評価している。また、バージェスが授業で学生に示したリーディング・リストには、シカゴ大学出版会から出版されてきた複数のモノグラフに混ざって、ドノヴァンの著作三冊が複数年にわたり、揃って含まれていた [Burgess BOX 27]。

女性が大学で学問や研究をどのように担ったのかを考える際、シカゴ大学が設立当初から学部、大学院の双方で男女共学 (co-education) の高等教育機関であった点は強調すべきであろう。現在と異なり、19世紀末には、まだ共学の高等教育機関は少なかった。旧宗主国のイギリスと比べれば、アメリカの女性には高等教育の機会が開かれていた。しかし、アイビーリーグと呼ばれる東部の伝統校のうち、共学だったのはコーネル大学のみであり、他の大学の共学化は1970年代以降と遅い。共学化が最も遅かったコロンビア大学は、1980年代まで別学であった。こうした男性限定の伝統校と対をなして、19世紀半ば以降、セブン・シスターズと呼ばれる女子大学など、女性を対象とした高等教育機関が作られていった。これらの女子大学は、20世紀後半に共学化を計るアイビーリーグの大学と合併したり、単独で共学に切り替えたりして、現在も女子大のまま残っている所はわずかである。

開学時、シカゴ大学の初代総長となったハーパーは、セブン・シスターズに含まれる名門校、ウェルズリー・カレッジの総長だったアリス・フリーマン・パーマーを招聘して女性学部長 (Dean of Women) の役職に任命するとともに、これらの女子大から教員を雇用した。女性学部長とはアメリカの大学で、女子学生の生活などに責任を負う役職として、多くの大学におかれていたものである。現在の大学では、学生部長 (Dean of students) という役職に置き換えられている。ウェルズリー・カレッジからシカゴに移ったマリオン・タルボットは、1905年、37歳でパーマーの後を引き継いで女性学部長に就任し、1925年に退職するまでその地位にあった [Mercado and Turk 2009]。また、アメリカにおける女性学部長の歴史をまとめたJana Nidiffer [1999] は、タルボットを、女性学部長に、本人が高等教育を受け、高い学識を持つ専門職が着任するようになった先例と位置づけている。

シカゴ大学は、共学の大学としてスタートしたものの、女子学生の数が順調に増え、学業面でも活躍したことが、寄付者や理事の不安感をあおることになった。1902年には、Phi

Beta Kappa Honor Society という名誉団体に選出された成績優秀者のうち、半数以上が女性だったために、このままでは大学が女性化してしまうという不安が高まり、理事会が賛成多数により、大学1、2年の間は、授業を男女分離して行うことを決定し、数年間続いた [Mercado and Turk 2009]。この時タルボットや哲学者のジョン・デューイはこれに反対している。また女子学生の行動に対しては、周辺住民から批判的な文書が大学宛に届くことも多く、これに対応するのも女性学部長の仕事の1つであった。

しかし、男女共学であったことは、必ずしも女性が男性と平等な機会を得ていたことを意味しない。女性部長のタルボットは、就任時から、衛生科学学部 (Department of Sanitary Science) の設立を学長のハーバーに訴えていたが、結局断念し、家政学部が作られた。シカゴ大学では、女子学生も自由にコースを選ぶことが出来たが、やはり、タルボットの専攻する家政学部を選択する学生が増加したという [Mercado and Turk 2009]。また、後に述べるように、1920年に学部となった社会政策学部 Department of Social Service Administration (SSA) が、創設メンバーに女性を多く含んでいるのと比べると、社会学部では相対的に女性が目立たなかった。

大学を卒業した女性たちにも、同等の学位を持つ男性と同じような仕事が待ち受けていたわけではなかった。1910年代のアメリカにおける社会衛生運動を検討した松原宏之 [2013] は、ジェーン・アダムズのハル・ハウスに高い能力を持つ女性たちが数多く集まったことを指して、大学を卒業しても参政権もなく、職業選択の幅も狭かった高学歴女性たちにとって、社会問題は男性や従来の社会組織が関与しない「未開の大地」だったと述べている。

20世紀前半のシカゴ大学で、女子学生はどの程度の割合を占めていたのかについては、はっきりした資料を見つけれられていない。しかし、たとえば、バージェスが1929年に開講していた犯罪 (Criminology) の授業出席簿を見ると、学生18名のうち10名が女性と思われる名前であり、女子学生はかなりの割合を占めていたと考えられる。この女子学生の割合に比して、社会学部の教員や、シカゴ大学出版会の社会学シリーズに女性が占める数は少ないと言わざるを得ない。

### 2-3 観察対象としての女性

シカゴ学派社会学の担い手は男性に偏りがちであり、加えて女性の手による調査や研究への関心が相対的に低かった。しかし、シカゴ学派社会学は、女性がいなければ成り立たない。なぜなら、社会変動の中で、特に女性の役割や生活の変化は、社会学の重要な関心の対象であったためだ。



シカゴ大学が開学した19世紀末は、シカゴという都市が誕生し、急速に拡大した時期と重なる。アメリカの国内外から流入し、シカゴを拡大させた人びとは、移動前とは異なる生活を送ることになった。特に女性は、彼女たち自身の労働や家族生活が大きく変化しただけでなく、その変化を社会の中にどのように位置づけ、理解していくのかが定まらない状態にあった。ウィリアム・I・トーマスは、1922年に出版した『アンアジャスティッド・ガール The Unadjusted Girl』の中で、「適応できない、非行をする」人の例として「浮浪者と売春婦」を挙げている [Thomas, 1923]。社会秩序に適応できない状態や逸脱行動を通して、社会の秩序やその変化を考察する研究は、シカゴ学派社会学には数多く見られ、その中で女性は男性と同等に研究対象になっているのである。

社会学に限らず、メディアや小説にも従来とは異なる女性の姿が描き出されている。フィクションではあるが、1900年に出版されたシオドア・ドライザーの『シスター・キャリー』は、この時代の気分をよく表している。小説はウィスコンシンの農村部に住む18歳のキャリー・ミーバーが、姉夫婦を頼ってシカゴにやってくるころから始まる。憧れていたシカゴに来てみたはよいが、ふたを開けてみれば、働き始めた製靴工場の劣悪な労働環境、安い賃金から姉夫婦に支払う家賃をひくとほとんど手元に残らない余裕のない生活に彼女は打ちのめされる。さらにその仕事さえも、数日病気で寝込んで欠勤すると解雇されてしまう。次の仕事を見つけることが出来ず困っていたところに、キャリーは列車で会ったセールスマンのドルーエと再会して、同棲するようになる。さらにキャリーは、ドルーエが通うレストランの、雇われ支配人であるハーストウッドから求愛される。既婚だが家族との関係に行き詰まっていたハーストウッドは、店の金を盗んで、キャリーとニューヨークに駆け落ちしてしまう。

『シスター・キャリー』は出版直後、内容が不道徳であるとして発行差し止めになった。しかし、後に、当時の都市生活や人々の欲望を描いた小説として高く評価されるようになった。この小説の中に私たちは地方から都市に出てきた女性の生活の変化とともに、これに対する人びとのまなざしを見ることができる。たとえば、ドルーエとハーストウッドが、キャリーとの間に取り結ぶ関係は、モノガミーの婚姻とは大きく異なっている。ドルーエは、たまたま列車で行き会わせただけのキャリーを、精神的にも経済的にも窮屈な姉夫婦との同居、労働量が多いのに時給の安い仕事から救い出してくれる。しかしドルーエはキャリーと正式に結婚しようとはせず、女優の仕事を紹介する際にも、相手にキャリーとの関係について嘘をつき、单身男性としてふるまい続けようとする。他方、ドルーエからキャリーを紹介されるハーストウッドは、身なりやふるまいから裕福な都市生活者の階層に

属しているように見えるが、実際には雇われ支配人に過ぎない。彼はまた家庭内の唯一の稼ぎ手として、妻子から要求される豊かな生活を支えなくてはならないというプレッシャーに苦しむ、意識と現実の間に距離のある人物として描かれている。彼はドルーエに対する競争心と、家族から逃れたいという思いから、店の金庫から横領して、キャリアとニューヨークに駆け落ちするが、支配人という役割を離れた彼は、女優として成功するキャリアとは対照的に、悲惨な最期を遂げる。

ドライザー自身、19世紀末に地方から都市に移住し、それによって職業や社会階層を上昇させていった1人である。他方、『シスター・キャリア』の物語の軸となるキャリアの社会上昇は、ドルーエとハーストウッドという2人の男性との関わりを契機としている点で、男性であるドライザーとは大きく異なっている。

『シスター・キャリア』はフィクションであり、事実に基づくものではないが、シカゴ学派社会学が描き出す、女性の社会関係やその変化に対する関心と親和性を持っている。19世紀から20世紀にかけて、急激な都市化が進み、人々の価値感や他人との関わり、娯楽や人生の目標などが大きく変化していった。その変化は、一方で社会の退廃や逸脱行動として、否定的にとらえられたが、他方で、研究者や人々が経験した具体的な変化を通じて、社会を記述することに関心が向けられたのである。さらに、人々が経験する変化が、出身や性別によって異なっていることに対しても、ドライザーの関心が向けられていることが分かる。

### 3. シカゴ学派社会学と研究・観察する女性たち

#### 3-1 ジェーン・アダムズとハル・ハウスの「Maps and Papers」

『シスター・キャリア』と対比してみた場合、社会学が描く社会変動と女性にはどのような特徴があるのだろうか。この章では、フィクションである『シスター・キャリア』に対し、社会学の領域での現実社会の記述と分析の事例を3つとりあげ、その中に描かれた対象としての女性と、研究者・観察者や支援者として、社会変容を考察した女性のあり方を検討していく。

はじめに、ジェーン・アダムズとハル・ハウスの社会調査を見ていこう。イリノイ州の裕福な家庭に生まれたアダムズは、大学卒業後、ヨーロッパ滞在中にロンドンでみたセツルメントに感銘を受け、1889年、エレン・ゲーツ・スターとともに、シカゴ中心部に近いニア・ウェストサイドにセツルメント、ハル・ハウスを設立し、移民や貧困者への社会支

援に従事した [アダムズ 1910=1969]。シカゴに大量に流入していた移民や単身女性の貧困問題が、彼らの目前にある社会問題であった。現在、ハル・ハウスのあった場所には、イリノイ州立大学シカゴ校があり、当時の建物の一部を利用するかたちで、ジェーン・アダムズ・ハル・ハウス博物館が運営されている。博物館の展示からは、セツルメントの住民に対し、教育にアクセスできない人々へのリーディング・グループの開催、陶芸や織物などの手工芸、絵画など様々な社会活動が行われていたことが分かる（図1）。

また、開設から5年たった1895年、ハル・ハウスはレジデントたちによる近隣の戸別訪問調査を行い、その結果を“Hull-House Maps and Papers”として発表した。調査は、ハル・ハウス近辺、西はHalsted Streetから東はStateまで、北はPolkから南はTwelfth Streetまでの、外国人の多い区域で行われ、住民の国籍や使用言語、賃金、などを戸別に調べ、それを地図上に色分けして明示した（図2）。また、スウェットショップと呼ばれる、劣悪な労働環境を持つ工場についても、現状を記述した。ジェーン・アダムズは、この作品について「論文は未熟であるが公平で純粋な気持ちで近隣の事情をあつかったものである」[アダムズ 1910=1969: 144]と述べている。

ハル・ハウスとジェーン・アダムズのこうした取り組みは、ソーシャル・ワークが博愛主義に基づく社会改革でありながら、現状を正確に把握し、分析するという志向を強く持っていたことを意味している。1910年代のアメリカにおける社会衛生運動を分析した松原宏之 [2013] は、ハル・ハウスにおける母性主義的なソーシャルワークが反売買春運動に



図1 ハルハウス博物館外観

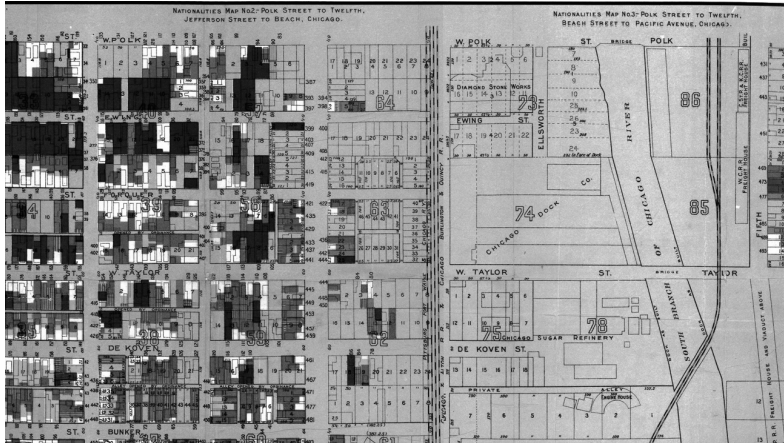


図2 “Hull House Maps and Papers” (1895) に含まれる地図。

重要な役割を果たしたと論じる。松原が論じるように、ハル・ハウスは単なる慈善事業ではなく、政治をはじめとする公の意志決定へのアクセスを持たない高学歴女性が、“Maps and Papers”に代表されるように、科学的な「データの収集と提示」によって、現状を共有し、世論を喚起する試みであった。1910年に行われた全米慈善矯正会議で、会長となったジェーン・アダムズは、売買春に対する対応を「事後的な手当てから予防へと運動の重心を移し」[松原 2013]、社会改革を進めていく必要を訴えたという。その結果、以前は、白人女性が奴隷化されているとするホワイト・スレイバリー論に基づく危機感、売春を行った人々を矯正するといった道徳的な議論が主であった社会改革運動が、どのような社会経済的な要因が、女性を追い詰めているのかというデータに基づいて、対策を立てていくものへと変化したのである。

他方、アダムズの文章には、依然として売買春を道徳的な感情の欠如や「墮落」と位置づける認識をみることができる。ハル・ハウスは、貧困や社会的な不正義を発見し、セトルメントが何を提供できるのかを明らかにし、政策によって支援を進める方法を検討していった点において先進的であった。しかし、同時に娯楽や享樂的な生活に振り回される個人の弱さが問題の背景にあるとする見方も依然根強い。

うかつな少女たちは、もし大きな家に住み、ピアノや宝石があれば、望ましい社会生活ができると信じている。あるボヘミア人の少女は暗くなるまで働き、超過勤務して、ピアノ付きの部屋を1週間借りて、ふだんはたくさん家族のいるきたない家では出来

ない夢であるこの部屋へ青年が訪れてくるのを待っていたのである。幸いこの無防備な少女をいち早く発見するような不良少年がいなくてよかったのである。[アダムズ 1910=1969:]

シカゴ大学の学生や教員の中にも、ハル・ハウスに関心を抱き、レジデントになる者もいた。メアリー・ジョー・ディーガン（1988）は、初期シカゴ学派における女性の役割を再評価する中で、シカゴ大学の社会学や哲学の研究者が、ハル・ハウスの実践に関心をもち、学生を滞在させたり、自身もハル・ハウスに通ったりして、連携を強めていたと論じる。『アメリカとヨーロッパにおけるポーランド農民』を著したウィリアム・I・トーマスも、ジェーン・アダムズと親交が深かったという。また、『ハル・ハウスの20年』には、ジョン・デューイの言葉も引かれている。

しかし、ハル・ハウスとのつながりは、社会学部よりも、社会政策や福祉の分野でより強かった。たとえば、1908年に作られ、1920年にシカゴ大学の一部となった社会政策学部（SSA）の創設の母 Founding mothers として紹介されているイーディス・アボットや妹のグレース・アボットは、20世紀初頭にハル・ハウスのレジデントをしていた。イーディス・アボットはシカゴで経済学の博士号を取得し、イギリスのLSEに留学した後、シカゴに戻って、ハル・ハウスを経てSSAの研究科長を1924年から1942年まで務めた。女性が大学院研究科長の役職に就いたのは、アメリカでは彼女がはじめてだった。グレース・アボットは1908年からハル・ハウスのレジデントになり、移民保護協会（Immigrants' Protection League）のディレクターとなっている。彼女たちの研究や、研究機関としてのSSAの活動に、ハル・ハウスなどのセツルメント、移民や女性を対象とした支援活動が大きな役割を果たしたことは想像に難くない。

社会学部では、トーマスなどシカゴ社会学の第一世代が去った1920年代以降、社会学部とハル・ハウスやジェーン・アダムズとの関わりは弱まった。第一次世界大戦への参戦反対を表明したアダムズが、アメリカ国内での権威を失墜したこともあってか [高山 1998]、ハル・ハウスと社会学部の直接的な結びつきはほとんどなくなっていく。アダムズと親しかったウィリアム・トーマスも、1918年に既婚女性とホテルにいたところをマン法違反で逮捕され、シカゴ大学を解雇されて、シカゴ学派社会学への影響力を失った。ロバート・パークやアーネスト・バージェスが中心になった戦間期の社会学部は、シカゴ大学出版から数々のモノグラフを出版するなど、多くの成果を世に出した。シカゴ学派社会学について論じる現在の研究の多くが、パークとバージェスの時代に言及していることから、そ

の重要性が分かる。しかし、こうした学史研究の中で、アダムズやハル・ハウスへの言及は多くない。

ディーガンは、こうした変化を、パークらが女性を排除する態度をとっていたからだとして結論づける。高山 [2008] も、パークが「女性の改革者」に対して否定的な言及をし、SSAの社会調査から距離を取って新しい社会調査の授業を立ち上げたというブルーマーの回想を引用している。ディーガンは、こうした動きに対し、パークの女性蔑視的な態度を批判する。他方、社会学が専門性を高めていく過程で、19世紀に盛んだった社会調査法に対する関心が弱まり、大規模な定量調査が主要な方法となっていったことも、変化の背景にあるといわれている。

### 3-2 「タクシーダンサー」を通して見る社会変容

ポール・G・クレッシーの『タクシーダンス・ホール (The Taxi-Dance Hall)』は、1929年にシカゴ大学社会学部に提出された、修士学位論文“The closed dance hall in Chicago”をもとに、1932年に社会学シリーズの1冊としてシカゴ大学出版会から書籍化されたものである。クレッシーは、バージェスの指導学生のひとりだった。タクシーダンス・ホールとは、ダンスチケットを購入すれば、ダンサーとして控えている女性たちと1曲分踊ることができる場所であるが、当時不道德な場所として批判の対象となり、経営を禁止する都市も出てきていた。バージェスは序章で、この本が単にタクシーダンサーという対象を描いているだけでなく、タクシーダンサーを通して、都市化による社会変動を描き出している点を評価している。ここでバージェスは、都市化を社会が文化的に多様になるとともに、人々の関係性が希薄になり、匿名性が高まることとしている。また、娯楽や刺激が商品化され、これまでの社会関係が提供してきたものから変化している。当時、都市化に伴う社会問題に対して、改革を唱える人々は、規範に反する人々の行動を、道徳的に批判してきた。しかし、バージェスは、タクシーダンス・ホールのような新しい娯楽制度が生まれていることを理解し、従来の仕組みが人々に娯楽やつながりを提供できなくなっているという現実をきちんと調査する必要があると指摘する [Burgess, 1932]。

他方、クレッシーが調査を始めた1926年頃、クレッシーは、バージェスにリサーチプロジェクトの計画案を提出しているが、当初のタイトルは「フィリピン人の生活と閉鎖ダンスホールとのかかわり」であった [E. W. Burgess Papers, Box130, Folder 5]。クレッシーは、ダンスホールの「パトロン」、つまり客に、アジア系移民の多くを占めていたフィリピン人男性が多く含まれていると指摘する。出版された『タクシー・ダンス・ホール』で

は、第6章で、「パトロン」と呼ばれる客たちが、フィリピン人など、「人種的に差別される特徴を持つ」人々と、見た目上はマジョリティと区別されないが、文化や言語の面で十分にアメリカに同化していないヨーロッパ出身の移民たちであると述べている。こうした人々にとって、タクシーダンス・ホールは、自分が属するエスニック・グループを離れて、女性と関わることの出来る唯一の場所であった。

クレッシーは、「タクシーダンス・ホール」の常連客であるフィリピン人男性を対象にした理由は、フィリピン人男性を通して、はじめてダンサーとして働く女性たちに接近することが可能になるためだと述べている。男性であるクレッシーにとって、タクシーダンサーとして働く女性に話を聞くのは、難しい課題だった。「オリエンタル（東洋人）」とされる集団の中で、スペイン、アメリカによる植民地化の歴史を持つために、ダンサーの女性たちとの関わりがより密接だったフィリピン人を通して、ダンサーの状況にも接近出来ると考えたのだろう。出版された本でも、ダンサーとして働く女性の来歴や仕事、パトロンとの関わりなどに触れた部分と並んで、パトロンであるフィリピン人や移民の調査に多くのページが割かれている。

クレッシーは序文で、分析には、自分を含む観察者・調査者が5年間の調査で収集したデータに加えて、青少年保護協会 Juvenile Protective Association などの団体が持つ記録を用いていると述べている。他方ダンスホールの経営者から協力を得ることが難しかったため、包括的な定量データを集めることはできなかった。また、フォーマルなインタビューでも、満足のいく結果を生まなかった。そのため、観察者は、客として店を訪問し、カジュアルな会話を重ねることで、「フォーマルなインタビューで生じる抑制や抵抗に出会うことなくデータを集めることが出来た」[Cressey, 1932: xx]。

タクシーダンサーへの関心の高さは、ハル・ハウスなどのセトルメントの問題意識とも共通している。19世紀後半以降、売春が都市問題として浮上し、その実態を明らかにすべきだという認識が広まった。移民の増加に対する反感もあり、女性が性産業に従事させられることを、メディアや社会改革者はホワイト・スレイバリー White Slavery として問題化した。1910年に、シカゴに拠点を置く弁護士で、イリノイ州から選出された議員であったジェームス・ロバート・マンが成立に関わった「マン法」Mann Act<sup>2)</sup>により、不道德な目的により、女性を州を越えて移動させることが禁じられた。

---

2) 『ポーランド農民』を書いたウィリアム・トーマスが、シカゴ大学の教授職を失ったのも、このマン法での逮捕がきっかけであった。結果は無罪となったものの、彼はその後大学での正規の研究職につくことはかなわなかった。

前節で述べたとおり、ハル・ハウスの調査は、貧困など女性が売春を行わざるを得なくなる社会背景を調査し、予防することに重点をおいていた。これに対し、バージェスによる序章に見られるように、『タクシーダンス・ホール』の問題意識は、都市化や人口流動が新しい性的関係や娯楽の場を作り出している以上、これを単に道徳的に断罪するのではなく、調査によって現実を明らかにすべきだという立場にある。

クレッシーは、客としてタクシーダンス・ホールを訪れ、そこでパトロンである男性たちや、ダンサーの女性に話を聞いている。合わせて、パトロンの多くを占めるフィリピン人のクラブでの観察や、ホールの経営者へのインタビューを、データとして用いている。ダンサーの生い立ちや生活については、ダンサー本人への聞きとりだけでなく、ホール経営者への聞きとりから得られたデータも用いたと書いている。ダンサーの行動や客との関係性を通して、女性たちがどのようにタクシーダンサーとなっていくのか、タクシーダンサーがどのように多様なのかを明らかにする本書の分析は、解決すべき社会問題と言うよりは、新しい社会の中の女性の戦略に焦点を合わせているといえる。また、パトロンの男性にも分析を加えることで、移民流入が進む都市部における親密な関係性と人種の関わりを明らかにしている。

しかし、『タクシーダンス・ホール』の挑戦的な問題意識にも関わらず、人々の注目は、依然として社会問題としての女性に集中した。シカゴ大学出版会のファイルには、本が出版された1932年にでた新聞記事や新刊案内の切り抜きが残されているが、その大半が、ダンサーとして働く女性たちに注目している。記事には、フィリピン人などエスニック・マイノリティの男性たちへの言及はほとんど見られない。

例えば、タクシーダンス・ホール出版関連資料の中に収蔵されている、シカゴ大学出版会のあつめた新聞記事を見てみよう [University of Chicago Press Box 135, Folder 1]。1932年5月22日付け、Sunday Times Chicagoの記事には、“‘Lady Hobo’ Tells Taxi Dance Hall’s Lure”という見出しがつけられ、マンガで、地方から大都市シカゴに出てきた若い女性の姿が描かれている(図4)。はじめのコマでは、両親が娘に、「あなたを永遠に養うことは出来ない、外に出て仕事を探しなさい」と告げ、娘は都市に出ていく。2コマ目で、彼女はレストランでのウェイトレスと縫製工場での工員の仕事に就く。ちなみに、次節で扱うドノヴァンの研究対象はウェイトレスであり、『シスター・キャリー』のキャリーは、シカゴ到着後しばらくの間は製靴工場で働いていた。しかし当時のシカゴで女性がつく典型的な仕事である工場勤務やウェイトレスでは、女性たちは十分に暮らしていけない。そこで、タクシーダンサーという仕事が魅力あるものとして女性たちに示される、という解





図3 1932年5月22日 Sunday Times “Lady Hobbo’ Tells Taxi Dance’s Lure”



図4 Girls for Sale at 10 Cents a Tune! Why Taxi-Dance Halls Lure Youth

（その後に書かれているのは、『タクシー・ダンスホール』冒頭の抜粋  
[University of Chicago Press Box 135, Folder 1 (Paul Cressey Reviews)]

積が、このマンガには込められている。

これは、クレッシーや、彼を指導したバージェスが言いたかったことなのかは、書籍やフィールドノーツを丁寧に読んでいく必要があるだろう。バージェスのファイルに残されたクレッシーの丁寧にタイプされたフィールドノーツを見ると、クレッシーがダンサーとして働く女性本人へのインタビューには困難も感じていたことがうかがえる。たとえば、1926年3月24日のフィールドノーツ（図5）には、プラザというダンスホールから、電車に乗って大学のそばまで戻ってきた際に、偶然、「ベティ」というダンサーにばったり会ったというエピソードが書かれている。ベティはクレッシーに会うと、すぐに敵対的な態度になり、「自分をつけてきたのか」とクレッシーを非難した。クレッシーは、自分の住居がその

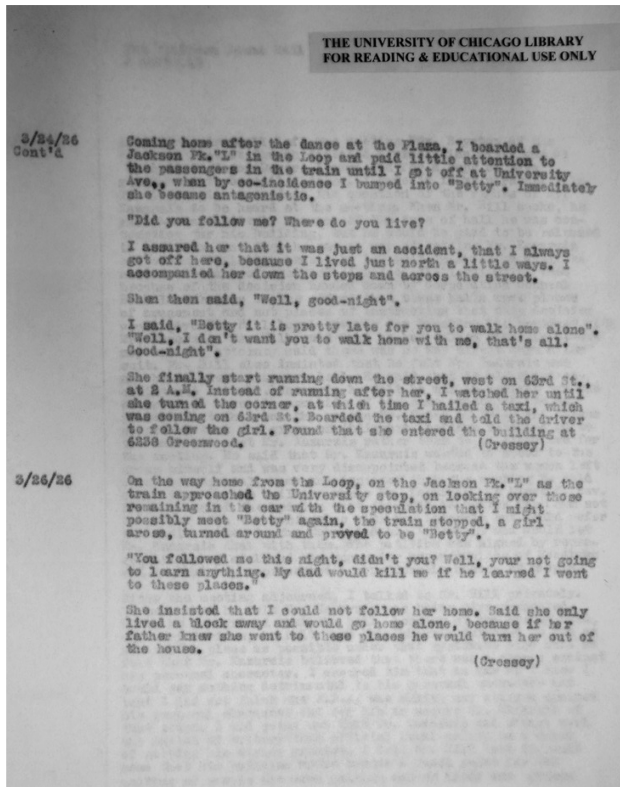


図5 クレッシーのフィールドノーツから（1926年2月24日、26日、ダンサーである「ベティ」との関わりについて書かれた部分）  
[Burgess Box 130 Folder 5]

近くであることを説明し、遅いので家まで送ってほしいと提案するが、ベティは、それを断って、ひとりで走って帰ってしまった。クレッシーはしばらく彼女が走って行くのを見た後、63rd streetでタクシーを止めて乗り込み、ベティが家に帰るのを追って、家に入るところを確認した。26日に彼はまた同じベティに会ってしまった。クレッシーはベティに、「また私をつけてきたのね？前に言ったことを何も分かっていないのね。父に私が通っている場所（ダンスホール）がばれたら、父に殺されてしまう。だから家に着いてこないで」と言われた、と書いている。

このエピソードは、クレッシーが序文に書いている方法論についての記述を裏付けている。クレッシーとその調査チームは、ダンサーに対して、ダンスホールでの観察や、インフォーマルなインタビューを行うことは出来たが、フォーマル・インタビュー、つまりまとまった時間をとってダンサーとして働く女性たちの認識や解釈を聞くことはできなかった。

た。それはタクシーダンサーという仕事には社会的な偏見があったからに他ならない。クレッチーは、調査者としての困難や限界を自覚しながら、可能な調査方法を組み合わせて、データをできる限り広くあつめて、「社会的世界」を描き出そうとした。タクシーダンス・ホールに集う人々に広く調査を行った本書だが、新聞記事を見ると、人々の関心は、もっぱらわずか10セントほどの金額で、知らない男性とダンスを踊る若い女性たちに集中してしまう。これらの新聞記事は、タクシーダンサーやパトロンの動機や行動に影響を与える社会構造への理解と言うよりは、彼女たちの様子を興味本位に消費し、社会的な問題を女性の個人的な動機に還元してしまう見方を代表している。

### 3-3 ウェイトレスの参与観察

フランシス・ドノヴァンは、シカゴ学派社会学の他の研究者とは異なり、正規の学生としてシカゴ大学に在籍した人物ではない。もともと教員として働いていた彼女は、建築家だった夫が万博の仕事でシカゴに移住したため、夫に合流してシカゴに移ったが、夫は病気になる、その後亡くなってしまった。彼女は、聴講生としてシカゴ大学で社会学の講義に出席し、特にパークの指導を受けた。彼女は1920年にこの『ザ・ウーマン・フー・ウェイツ（給仕する女）』を出版し、その後1929年にシカゴ大学出版から、ニューヨークのデパートでのフィールドワークを元とする『セールスレディ』を、そして1938年には、彼女自身の仕事であった教師を対象とした研究、『スクールマム』を出版している。

研究者としてメインストリームにいたとは言いがたいドノヴァンだが、『セールスレディ』出版にあたっては、ロバート・パークがシカゴ大学出版会に対して、ドノヴァンの書籍出版を後押しする推薦状を書いている。また、シカゴ社会学を代表する教科書である、パークとバージェスの“Introduction to the Science of Sociology”にも、章末につけられた文献リストに、この『ザ・ウーマン・フー・ウェイツ』があげられている [Park and Burgess, 1921: 569]。いずれも邦訳はないが、シカゴ大学出版から出た『セールスレディ』については、調査から出版に至る背景や、内容についての詳細な紹介がされている [中野・水野 2000, 2001]。中野らは、ドノヴァンが、シカゴ大学の正規の学生ではなかったことを指摘し、女性であることと合わせて「二重のマージナリティを背負っていた」 [中野・水野 2000: 3] と指摘する。他方、シカゴ大学の外からパークのセミナーや社会調査協会の会合に参加していた人はドノヴァンに限らず多くおり、パークも彼らと長年にわたって連絡を取り合っていたという [Raushenbusch, 1979]。中野らは、『ホーボー』の著者ネルス・アンダーソンがドノヴァンに対するネガティブなコメントを残しているのに対し、パーク

のもとでPh.D.の学位をとったヘレン・マギル・ヒューズは、ドノヴァンが、調査チームや助成金に頼ることなく、自力で調査を成し遂げたことを高く評価していると指摘している。つまりドノヴァンは、シカゴをフィールドとする独立した研究者であった。

本稿では、第1作である『ザ・ウーマン・フー・ウェイツ』をみていこう。ドノヴァンは、まず第1章でウェイトレスを対象に調査を行おうとした理由を説明している。シカゴの中心部であるループでは、様々な見た目の「働く女性たち」が行き来しており、彼女たちは、給与の高いマネージャーや弁護士の秘書、タイピストや事務員、店の売り子、マッサージ師やネイリスト、美容師、など多様な仕事についている。他方で、新聞には、冒険を求めて田舎からやってきた若い女性が巻き込まれる不幸な事件が毎日のように報じられていた。こうした女性の多様性にもかかわらず、報道に現れる女性のイメージが非常に表層的であると感じたドノヴァンは、シカゴのレストランで働くウェイトレスという職業を対象として選択し、参与観察を行うことを決める。

ドノヴァンは毎日レストランで料理をサーブする若い女性たちが、どこからやってきて、どのように仕事を見つけ、どのように働いているのか、という点に興味を持った。アメリカでは第一次世界大戦中に、女性の労働市場への進出が進み、以前よりも多くの女性が、賃金労働につくようになっていた。彼女は、女性が働くのが家業以外で一般的になった社会における女性労働の現状を明らかにしようとしたのである。

ドノヴァンは、調査方法として、実際にシカゴにある複数のレストランでウェイトレスとして働く、という参与観察を9ヶ月間行った。女性であるということが、身分を隠してウェイトレスとして働くという方法において有利であったことは間違いない。しかし、ドノヴァン自身は、教師、企業の管理職として働いた経験を持つミドルクラスの女性であり、それまでウェイトレスとして働いたことはなかった。調査を始めるに当たり、彼女はまず、シカゴの新聞に掲載された求人情報を見て、求人が出ていたレストランを訪問し、仕事の空きを探す、という方法をとる。はじめに訪問したレストランで、すでに空きが昨日埋まってしまった、と断られたことについて、彼女は以下のように書いている。

「私はすごくほっとした。彼（レストランオーナー）が断ってきたことで、私はウェイトレスになるという義務も消えたように感じた。結局、私はもしかしたら、ウェイトレスになる必要などないのではないか。たぶん、そのあたりを回って、誰かにウェイトレスについて尋ねれば十分なのではないか。私自身のこれまでの経験の領域とは全く違う、新しい世界での生活、という考えは、私にとって恐ろしいものだった」

[Donovan 1920: 18]

確かに、ドノヴァンは女性であり、ウェイトレスやデパートの販売員という女性的な職業を、その中に当事者として入り込むという方法で調査することが出来た。これは、男性であるクレッシーがタクシーダンサーになりすますことは難しく、彼女たちに調査を行うためには、まずフィリピン人のパトロンに接近する必要があったという状況と対比して、女性であるというメリットを生かした調査であったと言えるだろう。しかし、ドノヴァンが、自分がついたことのない仕事につき、これまで関わりを持たずにきた人々とともに働くことに対して、不安を感じていたことを無視すべきではない。つまりドノヴァンが女性であるということは、彼女の調査が自分と似た人々への調査であったことを意味しない。

その後ドノヴァンは9ヶ月間の間、様々な方法でウェイトレスの生活にアクセスし、15カ所でウェイトレスをしている。求人広告を見て飛び込みで仕事を探したり、1915年に作られたウェイトレス・アライアンスに所属して、紹介された仕事に就いたりもしている。また、同じように働くウェイトレスと仕事内容などについて話をし、数名には、仕事を離れて家に招かれたり、食事をしたりしている。

こうした調査を経て明らかにされるのは、まずウェイトレスの仕事が必ずしも一様ではないということである。長い時間働く勤務形態もあれば、ランチなど人が多い時間帯だけ雇われている人もいる。賃金やそこで得られるチップも店によって異なる。シカゴにある1250から1500ほどのレストランのうち、75%を占める「安食堂 hash houses」での仕事は皆が避けたがるが、店舗数に比例して仕事の口も多い。他方、毎日3時間働くだけで、よそよりも賃金やチップが高いだけでなく、美味しい夕食がつくという恵まれた店もあった。レストランが乱立するシカゴで、ウェイトレスたちは店の待遇を比較し、また店の側も、見た目が美しく若い娘たちを好んで雇用するといった競争が生じていた。

また、ドノヴァンの調査が興味深いのは、女性たちのセクシュアリティが仕事の中で商品化されるという状況が、決して犯罪化された売買春にとどまるものではなく、ウェイトレスのような仕事においても見られることを明らかにしている点である。当時アメリカでは、レストランがウェイトレスに支払う賃金は十分ではなく、彼女たちは客から受け取るチップを加えた収入をあてにせざるを得なかった。そのため、ウェイトレスの中には、女性客よりも男性客を好み、女性客には素っ気ない無礼な態度をとる者もいた。これは、一般的に女性客はチップを十分に支払わないためであったが、店によってはウェイトレスのこのような態度を許さず、解雇することもあった。また、チップの払いがよい客に対して

は、ウェイトレス同士の競争や、客に話しかけ会話を弾ませるなど、より積極的なサービスが行われていた。チップがたくさんもらえる美しく魅力的な女性であるために、賃金の多くが衣服やアクセサリーにつぎ込まれる、といった行動も観察されている。また客との間のセクシュアルな関係もあった。ドノヴァンは、一緒に働いているウェイトレスたちに、チップではなく、賃金だけで十分な額が払われる方がいいのではないかと質問するが、ウェイトレスたちは、賃金が抑えられていても、チップがもらえる方がいい、と即答する。ドノヴァンは、これはウェイトレスたちのゲームなのだと解釈している。

他のシカゴ学派社会学や、ハル・ハウスなどのセツルメントが、結婚の外側でやりとりされる女性たちのセクシュアリティを、逸脱や犯罪の枠組でとらえる傾向があったことに対し、ドノヴァンは、ウェイトレスという職務と強く結びついた駆け引きとして、セクシュアリティを考察する。18章には「セックス・ゲーム」というタイトルがつけられ、ウェイトレスの女性と男性客との間の微妙な関係を詳しく描写している。魅力的な女性よりも、経験を積んだ、仕事の出来る女性を雇うレストランも一部あるとはいえ、多くのレストランでは、見た目の美しい女性、若い女性の方が仕事を得やすい。ウェイトレスの仕事は、男性客との駆け引きを多分に含んでおり、ドノヴァンは、ウェイトレスたちがあけすけに語る男性との関係を、「私はその会話をここに再現できないし、するつもりもない」と述べている。

ドノヴァンの分析によれば、ウェイトレスと男性客や経営者との関係は、売春と境界を接しているが、売春とは異なっている。なぜなら、ウェイトレスたちは自分の生活に必要な賃金については、ウェイトレスとしての労働から得ているためである。ドノヴァンは、ウェイトレスの控え室でのやりとりを描写し、彼女たちのデート相手の選択やその理由を示している。例えば、あるウェイトレスは、結婚している男性と、「まだ子どもでお金を持っていない」若い男性の両方と並行して付き合い、彼らをだましているんだと話す。ループで最も忙しい店で数年働いている別の女性は、「結婚しているけれど、私はまだ貞淑な娘なのよ」と、しばしば男性と出かけて、酒を飲んでいると打ち明ける。この女性も、若い男性はお金を持っていないが、年をとった男は、すぐにお金を出してくれるのだと両者を比較する。他方で、ひとりの恋人に絞り、他の男性とは出かけないという女性もいる。

多くの場合、彼女たちが男性と持つ関係は、あくまでも社会的なものであり、売春ではないとドノヴァンは述べる。つまり、肉体的な関係よりは、男性と一緒に出かけることに重きが置かれている。男性たちも、一緒に出かけた女性に洋服などの贈り物をするが、サービスに対して金銭を支払っているわけではないと考えている。女性たちは、男性とデー

トしてプレゼントを買ってもらうことに対して、誇りを感じてはいても恥じている様子はみられないという。

もちろんウェイトレスたちのこうした自立は、危ういバランスの上にある。夫がいるウェイトレスは、ある日自宅に客のひとりが彼女をつけてきて、玄関のドアの下に自分の連絡先と「可愛いあなたのことをずっと見ていた。あなたに連絡を取りたかったけれど、上手いかないので、こんな方法をとった」と書かれている手紙を差し入れた。彼女は思わず夫に相談してしまったがために、夫の怒りを買って、次にこのようなことがあれば、その男を捕まえて警察に突き出す、と言われた。この事例は、ウェイトレスたちが、自分の身体やセクシュアリティを自分で管理していると思っていながら、実際には男性客や雇用主、夫などの家族メンバーから介入されているということを物語っている。

ウェイトレスの女性たちへの調査から、ドノヴァンは、都市の独身男性の側にも考察をすすめている。都市に暮らす単身男性が増加する中で、ウェイトレスは比較的声をかけやすい女性と見なされている。しかし、ウェイトレスと男性の関わりは、ストレートなものではなく、様々な駆け引きを含んでいる。彼女たちは、連絡先を渡されても、気に入った男性でなければ返事をしない。また男性たちも、用心深く振る舞い、気に入ったウェイトレスがいても、たいていは何度か店を訪れて、相手の「シグナル」を待つ。こうした環境のもとで、男性が「追われる者」となる。ウェイトレスは「追う者」として、関係性の中で主導権を持たざるを得ない。

ウェイトレスたちが、最終的に求めているのは、裕福な男性との結婚だ、とドノヴァンは述べる。ある女性は、友人が、株式市場のレストランでウェイトレスをして、そこに來ていた裕福な男性客と結婚したことをうらやましように話す。だが、そのようなケースはまれであり、女性たちは、理想の家庭生活を送るよりは、こうした「半売春」の生活を送り続けることになる、とドノヴァンは書く。これは、多くのウェイトレスはそれほど収入が高くない男性と結婚するため、結婚後もウェイトレスなどの仕事を続けていくということの意味しているのだろう。しかし、彼女たちはそうした状況に追い込まれ、搾取されているのではなく、「目を大きく見開いている」、つまり、自分の状況をきちんと理解しているのである。教員として働いてきたドノヴァンは、当時のアメリカ社会では結婚した女性は教員として雇われないし、多くの職業で、女性は結婚によって低賃金の仕事にしかつげなくなると述べる。しかしウェイトレスは、未婚、既婚、あるいは離婚といった婚姻ステータスにかかわらず、皆平等に仕事に就くことが出来る職業であった。ドノヴァンは、ウェイトレスの独立心を高く評価し、以下のように彼女たちの特徴を述べる。

「経済的に独立していることによって、ウェイトレスが男性との関係においても独立していることは興味深い。彼女たちは結婚する必要がないし、結婚を続ける必要もない。ほとんどのウェイトレスが、複数回結婚した経験を持っている。彼女たちは男性との間に、自由な関係を持ち、そのため、彼女たちもつきあっている男性から同等の自由を手に入れている……彼女たちは自由そのものであり、そのことを高らかに宣言しているのだ」[Donovan 1920:224]

他方、ウェイトレス同士は、店では知り合いでも、ウェイトレスという仕事を離れた私的な部分について、互いにほとんど知らない。同時に、隣人たちも、彼女がウェイトレスをしていることを知らないのだという。ドノヴァンは、同僚がある客が入ってきたときに身を隠し、「しばらく後ろに隠れさせて。彼らは私の隣人で、私がウェイトレスをしているとは知らないの。本当に恥ずかしい」と話したことを引用する。しかし、ウェイトレスたちは自分自身の基準で、自分の生活の価値を決め、仕事を続けているのだという。

中野・水野は、「ドノヴァンは女性の感性、視点、立場を最大限利用して、他の誰も真似できない仕事をした」[中野・水野 2009: 3]と評価している。しかし、ドノヴァンの率直な記述を読むと、彼女の観察者としての資質は、単に女性だからというだけにとどまらない。また、ドノヴァンの文章は、参与観察に基づいた平易な語り口で書かれているため、単に女性が、女性であるという利点を生かして経験できたことを書き綴ったかのように見えるかもしれない。しかしこうした見方はこの本の価値を過小評価してしまうだろう。もちろん、自らが女性であるために、ウェイトレスという女性の職業にうまく溶け込み、調査を行うことが出来たという点では、これは属性をうまく生かした調査だと言うことが出来る。だが同時に、ウェイトレスという職業を調査対象として選んだこと、性的な関係性が道徳的な生活からの逸脱と位置づけられる傾向があった時代に、一方的に決めつけずに、彼女たち自身の価値観を把握していることは、もっと評価されるべきだろう。ドノヴァンは文中で、W.I. トーマスの「状況の定義」に触れているが、ウェイトレスの行動を外部の価値から見るのではなく、解釈学的に分析する姿勢を貫いている。その点で、この研究はシカゴ学派社会学の伝統の元にあり、その結果として、変化する社会における女性の役割を、それまでの論者とは異なる形で書き出すことに成功している。



#### 4. 結論

本稿は、まずシカゴ学派社会学が、女性を事例としてどのように社会を分析したのかを考察した。次いで、男性だけでなく、女性も社会を描き出す役割を引き受けてきたこと、また女性が調査をし、観察する側に立つとき、研究者としての立場や内容に、男性研究者と比べてときに違いがあるのかを見てきた。20世紀初めのシカゴ学派社会学が、都市化をはじめとする変化の中で、新たな社会問題が生じたとき、それをしばしば女性の変化や問題として分析していたことは、例えば、少子化や晩婚化が、女性のライフスタイルの変化として語られることの多い現代日本とも共通点がある。

第1章で述べたように、シカゴ学派社会学については、第1次世界大戦に参戦をきめたアメリカにおいて、反戦を主張していたジェーン・アダムズの影響力の弱まり、1918年のトーマス失脚などを経て、シカゴ学派社会学は変質した、あるいは、その変質の後こそがシカゴ学派社会学の中心的な部分だという見方がある。シカゴ学派社会学の代表的な研究者であるパークやバージェスの時代には、ハル・ハウスなどの社会運動との関わりは目立たなくなり、肯定的にも否定的にも、社会学と社会運動、社会福祉とが切り離されたとする研究が多い。

しかし、パークやバージェスを、ハル・ハウスとのつながりや初期のシカゴ大学における社会学から決別した研究者と見るのは適切とは言えない。また、シカゴ学派社会学が成立していく過程で、女性が主に関わってきた社会福祉、キリスト教の影響も強かった社会改革を切り捨てて、科学的、客観的な社会学となったとも言い切れない。加えて、ドノヴァンの調査が、シカゴ大学の社会学部できちんと評価されていたこと、特にパークが彼女の調査を理解し、出版を後押ししたことを考えると、シカゴ学派の社会学者たちがミゾジニーから女性の価値を認めなかったと決めつけてしまうのは乱暴だろう。ジェーン・アダムズとの関係についても、確かに W. トーマスの失脚後、シカゴ社会学に対するハル・ハウスの影響力は小さくなった可能性が高い。しかし、クレッシーが『タクシーダンス・ホール』の調査に当たって、協力を得た青少年保護教会は、まさにアダムズが設立した団体である。『Maps and Papers』など、社会問題を多様な認識を持つ人々と共有可能なデータや分析として提示する必要性が、シカゴの社会学を鍛えあげていったともいえる。その意味でも、女性が果たした役割の大きさは強調されて良い。

社会問題が女性の問題として、さらには女性を保護することで解決可能だとして語られる傾向が強かった時代に、女性たちは、観察される者から観察する者、分析する者へと進

出していった。その結果、結婚や妻、母という役割に還元されず、自分たちの人生を自立して選んでいくような女性像が描かれるようになったのである。女性を、社会の中で保護されるべき弱い者とまなざすのではなく、自分自身の状況を経験や観察から理解し、定義する行為者として描こうとする態度には、シカゴやシカゴ大学で、それまで男性が優越してきた領域に活動を広げていった女性たちの存在感が影響を及ぼしている。また、セクシュアリティを男性から管理され、さらには利用される被害者としての女性から、自らセクシュアリティを巡るゲームに参加し、そのルールを決定していくような女性の姿が、1920年代に、女性の観察者によって描かれていたことは興味深い。このことは100年後を生きる私たちにしても、とても力づけられることではないだろうか。

また、これらのモノグラフを、その元になったフィールドノーツや他の研究者とのやりとりを通して、庇護される女性から、独立した決定を行う女性への変化を明らかにすることもできるだろう。女性は、男性と比べて表舞台に立ちにくいという現状は当時も今も変わらない。しかし、残されたデータの中に、都市を歩き、働く女性たち、それを観察し、分析しようとする女性たちが息づいている。現在に生きる自分は、その目的を通して、当時のデータに形を与えていく。その点で、シカゴ学派社会学が、全体として、あるいは個々の研究者の視点から、行った調査や観察には、20世紀初頭の現実だけでなく、現代社会を理解するためのヒントを見いだすことができよう。

#### 参考文献

##### 一次資料

シカゴ大学特別コレクションリサーチセンター  
Ernest Watson Burgess Papers 1886-1966  
Park, Robert Ezra, Papers, 1882-1979 (inclusive)  
The University of Chicago Press Records 1892-1965

##### 書籍・論文

アダムズ、ジェーン (1969)『ハル・ハウスの20年：アメリカにおけるスラム活動の記録』(柴田善守訳) 岩崎学術出版会 (Addams, Jane (1910) *Twenty Years at Hull-House*)  
アンダーソン、ネルス (1999)、『ホーボー ホームレスの人たちの社会学』(広田康生訳) ハーベスト社 (Anderson, Nels, 1923 *The Hobo: The Sociology of the Homeless Man*, The University of Chicago Press)  
Cressey, Paul Goalby(1929) *The Closed Dance Hall in Chicago*. (Thesis (M.A.) —University of Chicago, Department of Sociology. (<http://pi.lib.uchicago.edu/1001/cat/bib/4311406>)  
Cressey, Paul Goalby (1933) *The Taxi-Dance Hall*, Chicago: The University of Chicago Press.

- Deegan, Mary Jo (1988) *Jane Addams and the Men of the Chicago School, 1892-1918*, NJ, Transaction Books.
- Donovan, Francis (1919) *The Woman Who Waits*, Boston: Richard G. Badger. (Reprint edition)  
ドライサー、シオドア、1997 (=1900)『シスター・キャリー』上・下、岩波文庫。
- 鎌田大資 2008 「アメリカ社会学史における量的調査と質的調査——初期シカゴ学派およびアーネスト・W・バージェスの軌跡が照射するもの——」『フォーラム現代社会学』7 pp.114-125.
- 宝月誠、吉原直樹編 2004 『初期シカゴ学派の世界——思想・モノグラフ・社会的背景——』恒星社厚生閣。
- Hull-House Residents, 1895, *Maps and Papers: A Presentation of Nationalities and Wages in a Congested District of Chicago*, Boston: Thomas Y. Crowell and Company.
- 松原宏之 (2013)『虫喰う近代 1910年代社会衛生運動とアメリカの政治文化』ナカニシヤ出版。
- Mercado, M., Turk, K., University of Chicago. Library, & University of Chicago. Library. Dept. of Special Collections. (2009). *On equal terms": Educating women at the University of Chicago*. Chicago: University of Chicago Library.  
website: <https://www.lib.uchicago.edu/e/webexhibits/OnEqualTerms/> (2017/1/23 閲覧)
- Nidiffer, Jana (2000) *Pioneering Deans of Women: More Than Wise and Pious Matrons*, New York, Teachers College Press.
- 中野正大、水野英莉 (2000)「初期シカゴ学派における女性研究（上）フランシス・R・ドノヴァン『セールスレディ』」京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文 (49), pp.1-38.
- 中野正大、水野英莉 (2001)「初期シカゴ学派における女性研究（下）フランシス・R・ドノヴァン『セールスレディ』」京都工芸繊維大学工芸学部研究報告 人文 (50) pp. 81-123.
- シヨウ、クリフォード／玉井眞理子・池田寛訳、1998、『ジャック・ローラー - ある非行少年の物語』、東洋館出版社 (Shaw, Clifford, R., 1930, *The Jack-Roller: A Delinquent Boy's Own Story*)
- 高山龍太郎 (1998)「カリキュラムに見る初期シカゴ学派——1905年から1930年まで」京都社会学年報 第6号、pp.139-162.
- Thomas, William I., 1923 *The Unadjusted Girl: with Cases and Standpoint for Behavior Analysis*, Boston: Little Brown and Company.
- ゾーボー、H. 1997、『ゴールド・コーストとスラム』ハーベスト社、(吉原直樹・桑原司・奥田憲昭・高橋早苗訳 Zorbaugh, Harvey W., 1929, *The Gold Coast and the Slum*), Chicago: The University of Chicago Press.

#### 参考ウェブサイト

- ハル・ハウス博物館 <http://www.hullhousemuseum.org>(アクセス日2017年1月25日)
- 青少年保護協会 (Juvenile Protective Association) <http://jpachicago.org>(アクセス日2017年1月25日)
- "Our Founding mothers", Center of Social Service Administration, University of Chicago のウェブサイトより <http://ssa.uchicago.edu/our-founding-mothers>(アクセス日2016年8月19日)

本研究は、平成24年度関西大学在外研究員（調査研究員）研究費および、平成26年度若手研究者育成経費（研究課題「シカゴ学派社会学におけるジェンダーとセクシュアリティ」）として研究費をうけたものの成果として公開するものである。

—2017.1.27受稿—

